



百瀬恵夫先生



連合駿台会報

No.321 平成27年5月15日発行
 発行・編集 連合駿台会
 発行人 広報委員長・齋藤柳光
 編集人 事務局・矢嶋まゆ子
 〒101-0052 千代田区神田小川町三十一-二
 明治大学「紫紺館」内
 電話 (〇三) 三二九六一四七四七
 印刷 有限会社 美創

連合駿台会三月例会

「明大の名将監督に学ぶ人間力」

明治大学名誉教授・経済学博士 百瀬恵夫氏

連合駿台会平成二十七年三月の例会を、三月十八日(水) 十八時より、明治大学「紫紺館」三階会議室で、百瀬恵夫先生をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、山口政廣会長から次のような挨拶がありました(挨拶主旨)。

先般の三月七日に明治大学校友会の正副会長会あり、村山名誉会長のお話を伺う機会があった。今年八月に、安倍首相が「戦後七十年の談話」を出される予定だが、戦後五十年に当たる一九九五年に「戦後五十年談話」、いわゆる「村山談話」が発表された。前年に発足した連立内閣で、村山総理(当時)は、「この内閣には歴史的な約割があり、戦後五十年で国内外の問題にけじめをつけよう」と決

意した」というようなことを振り返って話をされた。当時、中国や韓国を訪問した際には、残念ながら歴史問題について強い意見を聞かされた反面、東南アジアの歴訪国からは、歴史認識よりは、戦後の経済的な発展・復興に対する日本の評価と経済的支援に関することを多く聞かされたようだ。こういう経緯から、五十年の談話には、アジアから信頼されないといけないと考えて、植民地支配と侵略・痛切な反省・心からのお詫び」という三つのキーワードを考え、外務省や学者の意見を入れて案文作成に当たったという。衆参議院に諮ったところ、決議ということにはならなかったようだが、閣議決定ということでは声明発表され、基本的構成は「戦後の歩み、過去の反省、未来への貢献」ということになっており、今日でもこの村山談話が高く評価されているのは周知の通りである。

それから十年後の二〇〇五年、当時は小泉内閣だったが、村山談話に基づいた歴史認識をまったく変えずに、痛切な反省と心からのお詫び」という部分を、冒頭に持つていき、継承姿勢を明確にした。さらに戦後生まれの世代が七割を超えたということも鑑み、未来思考の文言を初めて盛り込み、加えてテロに対する国際的見も積極的に取り入れ、独自性を持った「小泉談話」を発表した。この時は閣議決定はなかったようだが、二代の

総理が同様の談話を発表したもので、歴史認識については、日本政府の正式見解だ、という認識を持たれているようだ。

ところが、近年の中国の台頭、ウクライナをめぐる欧米とロシアの対立、テロの脅威を背景にして、さらに昨年は第一次世界大戦開戦百周年ということもあり、戦後七十年の今年、否応なしに全世界が第二次世界大戦を意識している中で「安倍談話」が発表される。ヨーロッパでは、ドイツの例もあり、侵略戦争の歴史を認めた上で、生まれ変わった平和国家としての歩みを誇りに持つ、という当たり前の発想が何故できないのか？ 日本が戦争について曖昧な態度を取り続けて、日本への関心を過去へ過去へと引きずることは、日本の損失ではないか？ という認識があるようだ。またアメリカも、安倍首相の歴史修正主義的な空気に懸念を持っているようで、日米関係の強化、日韓関係の改善となるような内容を期待しているらしい。

村山名誉会長も、戦後七十年の談話については、国策を誤ったこと、植民地支配や侵略をおこなってきたことを薄めたり、言い方を変えたりすると誤解を招き、不信を買うのでは……と心配されていた。いずれにせよ、今回の発表次第では、誇張・非難を含めたメッセージが世界中を飛び交うことが懸念され、できれば今までの路線を踏襲して欲しい

というのが、私個人の期待でもある。

連合駿台会は、運営委員会・各委員会を中心として活発に活動されている。先般の世界遺産・富岡製糸場への見学バスツアーにも、ご家族なども含め、五十名以上が参加され、懇親を深められたことをありがたく思う。今後も会員の方が参加しやすい会の運営を目指していく所存なので、皆さんからもご支援いただきたいと思っている。

当日の講演に關しましては、マイクの故障による録音不能で、内容(要旨)を掲載することができません。よって今回は、広報委員の大石哲也氏(昭和六十三年工学部卒)の取材記事によります。

*

今回の例会では、明治名誉教授・経済学博士でいらつしやる百瀬恵夫先生に「明大の名将監督に学ぶ人間力」と題し、講演を行っていただきました。

百瀬先生は、明大の名将として、故・北島忠治先生(体育会・ラグビー部監督)、故・島岡吉郎先生(体育会・野球部監督)、故・姿節夫先生(体育会・柔道部師範)の三名の先生の名を挙げ、スポーツを通じて、磨かれた人格を持つ「人間力」のある学生を育てられた、先生方の思い出をお話しされました。・「人間力」のある人を育てるには、スポー

ツが有効な手段であり、寝起きを共にして、愛情を注ぐことが重要。教育は「愛」である。

・「人間力」は、すなわち「武士道」(大和魂)であり、これからの社会においては、自身を奮い立たせる情熱があること。発信力があること、原理原則を踏まえた上で、利他の心を持つことが大切であること。

・明治大学は、「人間力」があり思いやりのある個を大切に「する大学」であることが大事。そして、その「人間力」で東大に勝つ！

また、「教職員は学生に愛情を！」「時に校友は、教育現場に口を挿むことも必要」ともおっしゃっていました。

私の学生時代、ラグビーの北島監督、野球の島岡監督は、現役で指揮をとられていました。八幡山には北島監督がいらつしやり、神宮ではバットを杖代わりに島岡監督がいらつしやった記憶があります。あの頃は、学生スポーツがとても盛んでした。ラグビーでは早稲田との試合で国立競技場を満員にさせ、野球では、優勝が決まる試合には神宮の外野席もほぼ埋まって、校歌、応援歌を必死で覚えたものでした。

当時、私は生田校舎で文化部連合会のクラブに属していて、遠くから見ている学生でしたので、ただただ、「凄い監督」という畏

敬の心だけでした。これからも、明治大学は「人間力」のある、無私で利他の心を持った卒業生を社会に送り出してもらいたいと思っています。

【講師略歴】

百瀬恵夫（ももせ・しげお）

一九三五年、長野県生まれ。明治大学政治経済学部卒業、後に同大学大学院博士課程単位取得。これまでに明治大学政治経済学部教授、ケンブリッジ大学客員フェロー（英国）、環境科技大学客員教授（台湾）、モンゴル国立大学客員教授、経済産業省・中小企業庁、厚生労働省・労働局等の各種審議会委員（長）、参議院第一特別調査客員調査員、明治大学体育会柔道部部长、体育会部長会会長、校友会副会長を歴任。

【主要著書】

『日本の風土における中小企業論』『企業集団化の実証的研究』『中小企業組合の理念と活性化』『日本のベンチャービジネス』（以上、白桃書房）、『検証 沖縄問題（共著）』『新事業創造論（共著）』『新協同組織革命』（以上、東洋経済新聞社）、『コンビニエンスストア』（日本経済新聞社）、『流通大破壊（共著）』（こう書房）、『道』『体育会系はなぜ就職に強い？』（共著）』『武士道』と体育会系（共著）（以上、第三企画出版）など。

◆広報委員会からのご案内（理事会議事録）

日時…平成二十七年三月二十八日（水）十七時
場所…明治大学「紫紺館」（2F会議室）

○新推薦会員承認の件

大原組織・会員増強委員長から、本日は五名の方（芳村正徳氏、新妻一彦氏、山路英夫氏、小山哲郎氏、竹下衛司氏）が推薦されており、委員会では全員について入会を承認した、という報告があった。これに関して、全員異議なく承認された。

○五月総会に向けて、各委員長より報告事項

〈総務・事業委員会 河村副委員長〉

総会に向けて、ということではないが、定期例会以外で、前回の理事会以降、五月総会までの諸行事の実施報告と予定について申し上げる。すでに終了済みのことでは、二月十八日には「新入会委員歓迎会」を行ったが、今回は出席者が五名と少なかったため、運営委員会の後、対面式のゆったりした形で行うことができた。三月十四日には、「世界遺産・富岡製糸場&高山社跡見学」のバスツアーを催行したが、天気にも恵まれ、バス二台、参加者も五十人余りあり、成功裏に終了した。ここからは次年度のことになるが、四月七日には、第七回オープンゴルフコンペ（於..

武蔵カントリークラブ）を、四月二十二日には、特に現役の若い経営マネジメントに携わる人を対象とした「ビジネス勉強会」（一昨年から実施、今回で第四回目）を、J・フロントリテイリングの山本良一社長を講師にお迎えして行う予定である。今回は「業界No.1を目指す、大胆な経営改革とは」というテーマで、これまであまり講演されていない内容となっているので、奮ってご参加いただきたい。

〈組織・会員増強委員会 大原委員長〉

当委員会では会員増強策に力を入れてきたが、本日承認された五名の方を入れると、今年度は二十二名の新入会員という状況である。加えて、入会審査を厳格に実施して、速やかな承認手続きの遂行を目指している。新入会員の定着策として、一つには「若手の会」を開催、また例会時に「卒業学部別テール」を設定して、もう少し定着率を上げて行きたいと努力している。

〈広報委員会 齋藤委員長〉

名刺広告は、予算より若干下回ったが、多くの方々にご協力いただき感謝申し上げます。ただいろいろご意見もあり、今後は紙面の刷新も考えながら考えていくつもりである。ホームページについては、定期発行物である会報の掲載には限界があるので、ここに載らないものも含め、最大限、情報を提供していく所存である。またこれは総会でのテーマに

なるかと思うが、時代の要請も含め、連絡等にメールを使う時期が来ていると思う。名簿を見ると七割以上の方がメールアドレスを保有されているが、ただ個人のメールアドレスと違い、会社で使用しているアドレスに関しては問題が生じることもあるので、これが今後の大きな課題であると思っている。

〈大学支援委員会 中川委員長〉

今年度の計画は大半が順調に進んでいるが、今後のことも鑑み、二点お話しさせていただく。一つは「産学協同就業力養成講座（キャリア教育支援）」については、新年度から商学部だけでなく経営学部も参加するということで、今までの四企業（京王電鉄・ホテルグランドパレス・りそな銀行・山崎製パン）に加え、三井住友海上火災にも参加していた。大きく予定になっている。もう一つは次年度のことになるが、年二回春期と秋期に実施している「寄付講座」について、今回は六月四日に開催予定。講師は当会の青柳勝栄副会長なので、大勢の方にご参加いただければと思う。

〈財務委員会 谷委員長〉

本日の資料の中に、「第3四半期（昨年十二月末日まで）」の収支計算書と貸借対照表が入っている。年会費収入は、予算に対して実績が約九〇%だが、最終的には予算をほぼ達成できると思う。例会費収入については、一月の例会費収入が少なかったため、予算を

下回り、広告費収入も広報委員長もご説明の通り、予算額達成はできなかったが、収入総額では、予算（1814万円）に近い数字になると思う。支出では、総務費では家賃共益費を毎年三月に前払いしているので含まれていないが、それを含めても予算をやや下回ると思われる。また事業費では、大学支援委員会費が予算をかなり下回りそうだが、これは

学術賞・学術奨励賞の受賞者が少なかったことが影響していると思われる。この学術賞については、明治大学自己点検・評価委員会による評価結果（大学に対する提言）の中でも「本学の研究業績を評価する仕組みのひとつとして『連合駿台会』学術賞・学術奨励賞」の表彰が実施されているものの、応募申請件数が少ない状況である。明治大学の研究成果をアピールするための制度でもあるため、こうした制度のより一層の活用を期待する」と記載されている。驚くことに、大学の年配の教授たちしてみると、応募してもし入選しないと恥をかくので出しづらい、ということがあるようだ。ということを考えれば、もっと若い人を対象にするなどの工夫が必要だと思われるが、これについては大学側と詰める必要がある。さらに、大学支援委員会の予算未達の要因の中に、留学生支援等（30万円）が、国際大学学生バスマスター支援金（5万円）のみで、この事業に関してはなかなか難

航されているようだ。

また予備費（50万円）も手つかずになりそうですねので、当期収支差額はプラスになると思われる。営利団体ではないので、利益が多ければ喜ぶということではないが、だからと言ってマイナスはまずいので運営は難しいとは思いう。財務委員会、というより全連合駿台会での検討事項として、連合駿台会の活動結果は数字として出ているが、連合駿台会の目的は何なのか？ ということになるのではないかと。まず会員同士の懇親があり、会員の連携・連帯を得てできる活動もあり、その一つが大学支援だと思ふ。校友会もそうだが、大学への支援の枠は、収入の二割くらいが目安だと思ふ。これを連合駿台会に当てはめれば、年会費収入（1500万円）から計算して、300万円くらいが妥当だろう。今は隔月で例会を開催し、ほかいろいろな行事もあるが、もっと大きな目的があり、それに対する支出がどうなっているのか、ということになると、これは委員会を超えた横断的なテーマであり、この大きなテーマを検討していかないと、当会の画期的な将来性は見えてこないと思う。さらに言うと、貸借対照表にある「負債・正味財産」にあるお金を、連合駿台会の大きな目的のためにどう使うのか？ ということの議論もそろそろ必要になってくるのではないかと考えている。

これに関し、次のような質疑応答があった。
・明治大学出身の教授が三〇%を切ったと言われるが、伝統校としてそれでいいのかという声が盛り上がってきている。学術賞関係にはせつかく予算を計上しているのだから、もつと若い方々（大学院生も含む）を「奨励賞」として応援してあげ

るべきで、定年間際の先生を応援する必要はないのではないか？ 将来の明治を担えるような世代、できれば三〇歳代の人を推薦していくようにしたらどうか？

↓今年の学術奨励賞は若い女性の先生だったが、「女性枠」を作って欲しいという意見もある。明治出身の先生が少ないことを懸念すると、「明治出身枠」があってもいいと思う。今いただいたご意見を参考にしながら、大学側の意向も含めてもう少し詰めて、われわれの意思をはっきりして支援していきたいと思う。 以上

◆新入会員ご紹介

前回までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。(敬称略・到着順)



芳村 正徳
昭和六十二年・法学部卒
桜神宮・宮司
東京都世田谷区在住



山路 英夫
昭和五十五年・法学部卒
(株)読売広告社
取締役執行役員
東京都多摩市在住



竹下 衛司
昭和四十二年・工学部卒
(株)竹下設計・代表取締役
茨城県取手市在住



小山 哲郎
昭和五十三年・法学部卒
(株)日本プレスメントセンター
代表取締役社長
東京都港区在住

◆計報

副会長の二宮忠氏(昭和三十二年・法卒、つばさ法律事務所所長)が、平成二十七年四月十八日に逝去されました。享年八十二歳。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

◆明大ニュース

●教員人事 新役職者が決定

任期満了に伴う新役職者が四月一日付で就任した。商学部は出見世信之教授、政治経済学部は鈴木利大教授、文学部は石川日出志教授が新学部長に就任。荒川利治理工学部

長、砂田利一総合数理学部長は再任された。五氏は寄附行為第十七条第二項第一号により、同日付で職務上の評議員となった。任期はいずれも二〇一七年三月三十一日まで。

このほか、図書館長に林義勝教授(文)、和泉委員会委員長に桑森真介教授(商)、学長室専門員に塚原康博教授(情コミ)、人文科学研究所長に守屋宏則教授(経営)が就任。また、社会科学研究所長に山田道郎教授(法)、国際総合研究所長に林良造特任教授(研究・知財戦略機構)、大学史資料センター所長に山泉進教授(法)、学生相談員長に山口政信教授(法)が再任された。

●四十一人の専任教員を新たに採用

明治大学は教育・研究のさらなる発展と向上を図るため、新たに専任教員四十一人を四月一日付で採用した。同日、駿河台キャンパス・大学会館で行われた辞令交付式には、日高憲三理事長、福宮賢一学長をはじめ、大役員・役職者が出席した。

あいさつに立った日高理事長は、少子化や国際化などにより厳しさを増す大学間競争の現状に触れ、「時代の大きな変化に対応し、世界に誇れる魅力ある大学づくりが必要。教育・研究・社会貢献のために情熱を注いでほしい」と激励した。

●新設のSGU担当副学長に長尾教授

新設のスーパーグローバル大学創成支援（SGU）担当副学長に、長尾進・国際日本学部教授が四月十六日付で就任。長尾教授の後任の広報担当副学長には、歌代豊・経営学部教授が同日付で就任した。任期はいずれも、二〇一六年三月三十一日まで。

●連合父母会

優秀学生九十八人に学部長奨励賞

連合父母会が優秀な学生を表彰する「学部長奨励賞」の授与式が各学部の新入生総合ガイダンス会場などで行われ、受賞者九十八人に賞状と記念品が手渡された。

この賞は、学部二年生（経営学部のみ三年生）までの課程を修了した学生の中から、学業成績の優秀者を表彰するもの。在学生の学業の励みにしてもらうとともに、新入生の勉学に対する動機づけの一助となるよう、一九九六年度から実施している。

●「スーパーグローバル大学創成支援」

採択記念シンポジウムを開催

明治大学は三月三十一日、文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」事業への採択を記念し、「東アジア地域における相互理解と相互信頼の醸成と安定的に繁栄する東アジアの形成にむけて」と題するシンポ

ジウム（外務省、アメリカ大使館など後援）を駿河台キャンパス・グローバルホールで開催した。

冒頭、長尾進副学長（広報担当）が関係者への謝辞を述べるとともに、グローバル化が加速する現代社会で「平和と豊かさをもたらすことができる真の国際人の育成に努めたい」と意気込みを語った。続いて勝悦子副学長（国際交流担当）が、「未来開拓力」に優れた人材の育成を目指す本学の事業構想を紹介。「東アジア地域において、未来志向のパートナーシップを強化したい」と本シンポに期待を込めた。第一部のキーノートスピーカーとして登壇した一九八八年民主党大統領候補のマイケル・デユカキス氏（ノースイースタン大学行政学教授・元マサチューセッツ州知事）は、米ソ冷戦以降のアジア太平洋地域の情勢と、日米中韓が担うべき役割について解説。「日本にとって、戦後ヨーロッパにおけるドイツの振る舞いは重要な示唆を与える」と述べ、建設的な立場で欧米諸国との関係を築いてきたドイツの姿勢を見習うべきとの見方を示した。

●「マスコミ交流会」を開催

石破当大臣と小田切教授（農）が対談

明治大学広報戦略本部は四月十七日、本学関係者とマスコミ関係者との交流や情報交

換を目的とする第二十一回「マスコミ交流会」を駿河台キャンパスで開催。リパティタワー二十三階・宮城浩蔵ホールで行われた第一部では、石破茂・地方創生担当大臣と小田切徳美・農学部教授が「地方創生で日本に活力を！農山村の経験から考える」をテーマに対談し、約八十人の関係者が会場を埋めた。

●日出学園高校と高大連携協定を締結

明治大学はこのほど、日出学園高等学校（千葉県市川市）との間で、高大連携事業に関する協定を締結した。協定期間は四月一日から一年間。双方の連携を通じ、同高の生徒が本学の教育研究に触れる機会を提供することで、両校の相互理解を深めるのが協定の目的。具体的な事業内容として、大学による教育プログラムの実施（出張講義等）、大学キャンパス見学会の実施、教育にかかわる意見交換会などが想定されている。

●努力の成果 十四団体九十六人を表彰

二〇一四年度のスポーツ表彰式が三月二十五日、駿河台キャンパス・アカデミーコモンで行われ、優秀賞・敢闘賞合わせて十四団体、九十六人が表彰を受けた。国内外の大会で優勝するなど、スポーツ活動で顕著な成績を残した体育会の団体・個人を表彰するもの。

式には受賞者のほか、明治大学体育会会長を務める福宮賢一学長ら大学役員・役職者や、体育会各部の部長・監督などが列席した。

●二〇一五年度入学式を挙行

八千七百三十九人が新たに明大生に

明治大学の二〇一五年度入学式が四月七日、日本武道館（東京都千代田区）で挙行され、多くの夢や希望を抱いた八千七百三十九人（学部生七千八百十四人、大学院生九百二十五人）が、明大生としての第一歩を踏み出した。式典は学部・大学院別に午前と午後との部の二部制で行われ、いずれも福宮賢一学長の告辞、日高憲三理事長の祝辞、新入生代表による宣誓と続いた。

●明治が誇る冒険家・植村直己に

ちなんだランが今年も花咲かせる

兵庫県上郡町で「城下農園」を営む農学部OBの城下孝司さん（一九七四年農学科卒業）が、同学部の大先輩である冒険家・植村直己をイメージして開発したランの花「adventurer NAOMI」が今年も、立派な花を咲かせた。植村直己冒険館（同県豊岡市）にて、五月初旬ごろまで展示される。

学生時代は体育会ワンダーフォーゲル部に所属していた城下さんは、山登りで多くの花に出会い感動したことから、卒業後に「城

下農園」を開園。二十四年もの歳月をかけて何度も交配を繰り返し、尊敬する植村直己にちなんだ、寒さに強い新種のシンビジウム（洋ランの一種）の栽培に成功した。

●OB社長

▽JTB北海道（サービス業） 〓 笹本潤一氏

（一九八三年経営学部卒・五十五歳）

▽サンデンホールディングス（機械） 〓 神田

金栄氏（一九七二年法学部卒・六十六歳、

六月十九日就任予定）

▽富士通ゼネラル（電気機器） 〓 斎藤悦郎氏

（一九七七年政経学部卒・六十歳、六月二十三日就任予定）

▽野村不動産ホールディングス（不動産業）

〓 沓掛英二氏（一九八四年政経学部卒・五十四歳、六月下旬就任予定）

▽日鍛バルブ（輸送用機器） 〓 金原利道氏

（一九八二年商学部卒・五十六歳）

●世界遺産登録をめざす東京講演会

明治大学の研究クラスターの一つである

日本古代学研究所と、世界遺産「飛鳥・藤

原」登録推進協議会は三月十四日、駿河台

キャンパス・リバティホールで、奈良県の

「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の世

界遺産登録を目指す講演会「世界に伝えたい

飛鳥・藤原の魅力」を開催した。

●世界に広がる協定校

四十四カ国・地域二百五十二大学と協定

明治大学は、サラマンカ大学、ライデン大学と大学間協力協定を、ワシントン大学建造環境学部、ヴツパタール大学、ハワイ大学カピオラニコミュニティカレッジと部局間協力協定を新たに締結した。協定校は四十四の国と地域、二百五十二大学となった（四月十七日現在）。

●故・小保内弘子教授（情コミ）の

遺志を継ぐ 留学生シェアハウスが完成

故・小保内弘子教授（情報コミュニケーション学部）の遺志を継ぐ形で建設が進められていた、明治大学の外国人留学生のためのシェアハウス「HIROKO House」（ヒロコハウス、東京都調布市）がこのほど完成し、現地見学会も行われた。小保内教授は生前、東南アジアの経済発展論を研究テーマとしたワールドワークを実施するとともに、これらの国々との人材交流を通じて、日本との相互理解を深める活動を展開してきた。

今回、実弟である小保内俊雅氏夫妻が小保内教授の遺志を継承し、本学で学ぶ外国人留学生に住居面での支援を行おうと、小保内教授宅の売却資金で中古一戸建て住宅を購入の上、シェアハウス（定員五人）にリフォーム。併せて、俊雅氏が代表取締役を務める管

理会社「Leibniz House」を設立し、運営する。

●短期留学の教育効果に関する

国際ワークシヨップ

明治大学は文部科学省「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業の取り組みとして、短期留学の教育効果に関する国際ワークシヨップ「Effects of Short-Term Study Abroad Programs on the Mindsets of their Participants」(短期留学経験が学生その後の考え方や行動のあり方に与える影響)を三月十二日、駿河台キャンパス・グローバルホールで開催した。

●国連創設七十周年記念

キックオフ・シンポジウムを開催

明治大学は三月二十七日、国連広報センターと立教大学、国際大学との共催で、国連創設七十周年記念「いま、日本から国連を考える」セミナー・シリーズ(全六回)のキックオフ・シンポジウムを開催。会場の駿河台キャンパス・グローバルホールには、研究者や学生など約百三十人が詰めかけた。

●一九八八年民主党大統領候補、

元マサチューセッツ州知事が表敬訪問

一九八八年民主党大統領候補で、元マサチューセッツ州知事のマイケル・デユカキス

氏らが三月三十日、駿河台キャンパスに来訪し、日高憲三理事長、福宮賢一学長ら大学関係者と懇談。翌三十一日には同キャンパスで開催された、明治大学の「スーパードロールド大学創成支援」事業採択記念シンポジウムにキーノートスピーカーとして登壇した。

●国際シンポジウム

「日米中ASEANは今何をすべきか」

明治大学国際総合研究所(MIGA)は四月六日、東京財団との共催による国際シンポジウム「日米中ASEANは今何をすべきか」アジア太平洋地域の平和と発展に向けて」を、駿河台キャンパス・グローバルホールで開催。福田康夫元内閣総理大臣の基調講演や、第一線の国内外有識者によるパネルディスカッションが行われ、会場は満席となった。

●大学基準協会による大学評価(認証評価)

明治大学は「大学基準に適合」と認定

明治大学は二〇一四年度に、学校教育法等により七年ごとに一度受審することが義務づけられている大学評価(認証評価)を公益財団法人大学基準協会に申請し、審査の結果、「大学基準に適合している」と認定された。認定期間は、二〇一五年四月一日から二〇二二年三月三十一日まで。

●サンパウロ大学法学部と部局間協定

法学部・大学院法学研究科・法科大学院はこのほど、ブラジル・サンパウロ大学法学部と、学生交流計画の実施に関する覚書を締結。間宮勇法学部長が現地で記念講演を行った。明治大学とサンパウロ大学は、二〇一〇年に大学間交流協定を締結している。

三月十七日にサンパウロ大学法学部で行われた調印式には、間宮法学部長とサンパウロ大学のジョセ・ロジェリオ・クルーズ・エ・トゥッチ法学部長、本学法学部の二宮正人客員教授(サンパウロ大学法学部教授)が出席。調印式後には「WTO多角的交渉の停滞と地域貿易協定の拡大」グローバルバリエーションの現状」と題した間宮法学部長による記念講演が行われた。サンパウロ大学院生向けの講演だったが、現地日系企業の駐在員である校友が多数を占める「明治大学ブラジル紫紺会」のメンバーも聴講。日々新たに制定されるさまざまな規制にさらされるブラジルでの企業活動に直結する内容で、予定時間の二時間を過ぎても質疑応答が途切れなかった。

●国際的な都市型大学ネットワーク

「WC2」の年次会合を明大で初開催

明治大学が加盟している国際的な大学間ネットワーク「World Cities, World Class University Network」(通称:WC2)の第

十回年次会合が三月三十日から四月一日の三日間、駿河台キャンパス・グローバルフロントを会場に開催された。

「WC2」は、世界の主要都市に拠点を構える都市型大学のネットワークであり、十二カ国十二大学（二〇一五年三月現在）で構成。大都市が直面する共通課題について、五つの分野の「Club」（交通、海外文化、健康、エコキャンパス、ビジネス）に分けて研究交流を推進するとともに、加盟大学が持ち回りで年次会合を開催している。今回、本学は初のホスト校となった。

●泰日工業大学(タイ)の学長らが表敬訪問

泰日工業大学(TNI/タイ・バンコク)のバンデイト・ローツアラヤノン学長らが四月十四日、駿河台キャンパスを訪問。本学経営学部との学部間協力協定締結に向けて、勝悦子副学長(国際交流担当)や牛丸元経営学部長ら本学関係者と意見交換を行った。

泰日工業大学は、日本からタイへの技術移転や現地日系企業のニーズに直接合った人材の育成を目的として、二〇〇七年に開校した新しい大学。インターンシップ受け入れなどの支援団体は日系企業を中心に三百以上のほり、日本語は学生全員必修。明治大学とは二〇一二年に大学間協力協定を締結し、これまで活発な学生交流を行っている。

●「女性のためのスマートキャリアプログラム」第一期生四十二人の入校式

明治大学初の履修証明プログラム「女性のためのスマートキャリアプログラム」(プログラムコーディネーター・小川智由商学部教授)の第一期生四十二人の入校式が四月十一日、駿河台キャンパス・グローバルホールで挙行された。

文部科学省が推奨するこの「履修証明制度」は、大学が人材養成の目的に応じて必要な科目を編成し、体系的な教育プログラムを構築することで、主として社会人向けに多分野の学習機会を提供するもの。本プログラムは社会連携機構のもと、本学の生涯教育拠点「リバティアカデミー」において、女性の仕事復帰や社会での新たな活躍を支援するビジネスプログラムとして開設された。

●リバティアカデミー開講オープン講座

「奇術の世界に心理学からせまる」

明治大学の生涯学習機関・リバティアカデミーは四月十八日、「奇術の世界に心理学からせまる」と題する二〇一五年度開講オープン講座を駿河台キャンパス・リバティホールで開催。人を惑わす奇術のトリックについて、マジックの実演を交えつつ心理学の観点から解説を行い、会場を埋めた約四百二十人の受講者が熱心に耳を傾けた。

●和泉図書館ギャラリーで企画展

今春、五千人以上の新入生を迎え入れた和泉キャンパスの和泉図書館ギャラリーでは、新入生が充実した大学生活への一歩が踏み出せるよう、大学の学びやキャリア形成、課外活動などをパネルでわかりやすく紹介する企画展「スタートダッシュ」今から始まる大学生活」が開催された。

自ら「選択」し、「決断」することが求められる大学生活。一気にさまざまな新しい情報を浴びることになる新入生に対し、和泉キャンパスの紹介や情報の整理を目的としてキャンパス全部署の協力を得て企画されたもの。

●グローバル人材の育成に向けて

新潟県立国際情報高校と意見交換

文部科学省の平成二十七年「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」指定校となった新潟県立国際情報高等学校(南魚沼市)の玉木正己校長らが四月十六日、駿河台キャンパスに来訪。福宮賢一学長、伊藤光副学長(総合政策担当)らと、グローバル人材の育成に向けた意見交換を行った。

同校のSGHプログラム構想名は、「雪国*米どころ*魚沼の世界発信を通じた人材育成」浦佐から世界へ」。地元の魅力を世界に発信するとともに、同じ南魚沼市にある本学の系列法人・国際大学と本学との連携を通

じて、地元さらには関連する世界の地域課題について、グローバルな視点で考察・提案できる人材の育成を目指す。

●日本新聞協会「HAPPY NEWS 2014」

明スポから三人が大学生大賞を受賞

日本新聞協会は「新聞をヨム日」の四月六日、読んで幸せな気持ちになった新聞記事とその理由コメントを募る「HAPPY NEWS 2014」の結果を発表。大学生大賞（個人）の受賞者五人中三人が、体育会明大スポーツ新聞部から選ばれた。

栄えある受賞者となったのは、沼田亮さん（経営4）、吉川真澄さん（文3）、原大輔さん（法2）の同部員三人。

沼田さんは、里親が子供のために作った料理のレシピ集を紹介した記事に自身の経験を重ね、「時を経ることで思い出の味はより深みを増す」とコメント。吉川さんは、四十一歳という最年長でのプロ将棋棋士誕生を伝える記事に「力強い言葉に刺激を受ける」と感想を寄せ、原さんは、文部科学大臣賞に選ばれた「おるす番の『音』」と題する小学生の作文の紹介記事に、「とても幸せて、少し切ない気持ちになった」と記した。

●水泳部

八選手がユニバーシアード出場へ

第九十一回（二〇一五年度）日本選手権水泳競技大会が四月六日～十二日、東京辰巳国際水泳場（江東区）で開催され、各種目で好成績を取めた体育会水泳部の八選手が第二十八回ユニバーシアード競技大会（七月三日～十四日、韓国・光州）への出場権を獲得。国際大会への切符を勝ち取った。

●東京六大学野球春季リーグ戦

東大に連勝、連覇へ向け勝ち点1

東京六大学野球の二〇一五春季リーグ戦が四月十一日に開幕。体育会硬式野球部は十一日、十二日の東大戦に連勝し、勝ち点1を奪取。昨年秋季リーグからの連覇に向け、幸先の良いスタートを切った。二〇一五年の新たなスローガン「for the top」の下、優勝へ向け攻め進む。（第五週終了現在、四位）

◆駿台トピックス

●世界遺産・富岡製糸場見学バス旅行を催行

三月十四日、会員の親睦の一環として総務事業委員会が企画運営した「世界遺産・富岡製糸場バスツアー」が行われました。世界遺産に指定された富岡製糸場を見学するということで、会員四十人に加えて会員のご夫人や関係者など五十二人のみなさまがお越しになりました。ちょうどこの日は北陸新幹線の開通日でもあり、東京駅近くで金沢から来た

一番列車を横目に見ながら、バス二台で出発しました。

まずは世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」の中核である富岡製糸場を訪問しました。まだ修復途中の部分もありましたが、大勢の観光客が訪れて大変な賑わいでした。建物内にはちよつと整備すればすぐにでも動きそうな自動操糸機が残されており、多くの会員が興味深く見学していました。

昼食の後、「富岡製糸場と絹産業遺産群」



の一つである高山社跡を訪問、蚕の繭を量産した生産システムを見学しました。最後に訪問した「こんにやくパーク」では、様々な種類のこんにやくを試食できるとあって、こちらにも観光客が大勢詰め掛けていました。ラーメンやレバーのこんにやくは本物のような触感で、お子さんやお孫さんへ良いお土産になりました。

バスはサロンカーになっており、帰る道々カラオケ大会になり、大いに盛り上がりました。皆さんがとてもお上手だったのにはビックリでした。一部渋滞に巻き込まれましたが、盛り上がり過ぎていたせいであつという間に東京に着いたように思います。丸一日ご一緒に過ごしていただき、とても楽しい時間を過ごすことができました。幹事をお務めいただきました杉浦様、並木様ありがとうございました。

(広報委員・相臺志浩Ⅱ平成九年経営卒)

●山本良一氏招き第四回ビジネス勉強会

四月二十二日、第四回目となるビジネス勉強会が、紫紺館にて行われました。

第一部の講演会は、J・フロントリテイリング(株)代表取締役社長でいらっっしゃいます、山本良一様をお迎えし、「業界No.1を目指す、大胆な経営戦略とは」をテーマにお話しいただきました。

山本先輩は、本学商学部(昭和四十八年)



卒、連合駿台会会員でもあります。在学中は、体育会バスケットボール部でご活躍され、二年生から四年生までの三年間、全日本学生選手権(インターカレッジ)で三連覇され、四年生時には主将を務められました。卒業後、(株)大丸に入社され、二〇〇三年に同社代表取締役社長兼最高執行責任者に就任。二〇一〇年に発足した(株)大丸松坂屋百貨店代表取締役就任、二〇一三年にJ・フロントリテイリング(株)代表取締役社長に就任されました。ご卒業後もバスケットボール部での教え「常に日本一を目指せ」(日本一にならないければ分からない良さがある)を実践され、(株)大丸、(株)大丸松坂屋の改革をされてきました。そして、「お客様

の期待を超える顧客満足を実現できる日本一の百貨店」、「小売業界のリーディングカンパニー」を目指し、持ち株会社のJ・フロントリテイリング(株)で指揮を執って

おられます。山本先輩は、とてもエネルギーがシユで、先頭を切って引張っていく、凄いパワーが漲る先輩でいらっしやると、感じました。目標を掲げ、各人に目的意識を持たせ、心を一つにさせ前進していくこと。「スピード」「スキル」「サイエンス」「スピリッツ」の四つの「S」が必要。「素直」「プラス思考」「常に勉強」が大事、とおっしゃられたことが印象に残っています。

早速、自身の会社の仕事を振り返り、特定の分野では「技術的にトップであること」「プライスリーダーであること」になるべく再考しているところです。行動においては「4S」の充実、「素直」「プラス思考」「常に勉強」を心がけて行こうと思います。このような時代に於いて、常に改革をして行かないと、現状維持すらもままなりません。常に「前へ」歩みを進めたいと思っています。

第二部では座談会が行われ、質疑応答の時間となりました。とても有意義な時間が持てました。山本先輩、ありがとうございました。(広報委員・大石哲也Ⅱ昭和六十三年工卒)

●第七回オーブンゴルフコンペを開催

第七回目になるオーブンゴルフコンペが、四月七日、埼玉県・武蔵カントリークラブ笹井コースで開催されました。ペリア方式による成績結果は、優勝は菊部彰夫会員(昭



卒)、ベストグロスは唯一80台で回った中川敏洋会員(昭和四十七年・経営卒)でした。

◆退会会員

(平成二十六年四月～二十七年三月)

五十嵐卓、五十嵐敏之、河原啓介、神沢瑞至、田代恵宥(故人)、中西幹育(故人)、中村欣治、野田昭榮(故人)、長谷川勝彌、濱崎治、福田吉弘、藤原二二、真野孝志(故人)、丸谷金保(故人)、山野純治、依田翼米倉健司
(敬称略)

◆三月例会出席者

青木孝、坪昭二、同ご友人(五人)、浅井

和四十三年・法卒)、準優勝は当コースのメンバーでもある並木洋一会員(昭和五十年・法卒)で、陶芸家の武内裕会員から寄贈された陶器が副賞として贈られました。第三位は石原道勝会員(昭和四十二年・政経

宏、浅倉晴司、阿部了、有賀隆治、石川おり、板橋光一、市川治彦、同ご友人、伊東正博、伊原敏雄、上西紘治、上野拓史、宇川一夫、宇田川雄弘、打出満、同ご友人(二人)、海野美津雄、梅津章、大石哲也、大原幸男、大前実之、大村託現、奥村勝広、押田裕介、片倉洋、同ご友人(二人)、勝保正義、荻部彰夫、同ご友人、河村博、木下重次郎、木村健一、清野明男、小柴和弘、小島清治、小濱雅説、駒田一郎、小谷野正道、小山修、根田哲雄、斉藤春夫、斎藤柳光、桜井保彦、佐藤和正、佐藤健、椎名茂樹、杉浦伸二、鈴木勝利、鈴木紘一、鈴木隆志、鈴木俊光、関孝夫、関根均、瀬戸正道、相臺志浩、園田英次、高澤徹、高橋郁夫、同ご友人、武内裕武田宣夫、田代恭一(代理)、谷慈義、田村駿、辻嘉右工門、天童美德、同ご友人、徳丸平太郎、富田浩志、富水流孝二、中川敏洋、長堀守弘、長見茂、中村豊、並木洋一、西尾勝治、西崎誠次郎、西山武夫、蓮池信之、長谷川進一、樋口郁夫、日高憲三、平川清、比良田幸雄、福田和彦、富士豊、藤巻伴英、前川一郎、同ご友人、眞壁八郎、横野泰(代理)、松崎優子、的場栄一、丸山律夫、向井眞一、向殿政男、村岡健、室井恵明、森一朗、森省三、柳内光子、山上雅隆、山口大介、山口政廣、山田朝彦、結城康郎、義江邦夫

【編集後記】

本年は大東亜戦争終結から七十年を迎え、安倍総理大臣の談話が注目されている。

明治大学の学生として戦地に赴き、戦場で散華された方々が数多くおられる。こうした英霊の御霊が、新潟県護国神社の戦没学徒忠霊殿に祀られ安置されている。昨年の全国校友新潟大会の時には、慰霊祭が執り行われた。もちろん護国神社においても、戦没学徒慰霊祭が執行されている。

戦後、日本は新憲法の下で、世界一平和な国として、七十年間戦争とは無縁な国家として歩んできた。国連加盟百九十三カ国の中では八カ国、アジアでは日本とブラタラだけ戦争のなかった国であり、世界に誇るべき貴重な歴史である。

連合駿台会のメンバーの過半数が戦争体験がなく、戦後の厳しく苦しい時代を経験していない世代になりつつあることを思うと今昔の感があるが、我々はあの過酷な時代を乗り越え、平和と繁栄を得ることができた。このことを再度認識し、さらに希望の持てる未来に向けて一層の努力を重ねていく必要がある。それが英霊の尊い犠牲に応える唯一の方法と思う。

大学も一八年問題を控え、これからが真価を問われる時に直面する。母校の限りない発展とともに、国家のありようにもなお一層の関心を寄せていきたいと思う。

(原田 榮)